

指定都市市長会シンポジウム in 札幌

スポーツとまちづくり

～スポーツがもたらす都市の豊かさ

東京 2020 を契機とした地方創生～

講演録

日時：令和2年2月15日（土） 17：00～19：10

会場：札幌市教育文化会館小ホール

【北海道オール・オリンピックズトーク】

テーマ：

「北海道出身のオリンピック・パラリンピアンが語るオリンピック・パラリンピックの魅力」

コーディネーター：鈴木 靖（オリンピック）

パネリスト：阿部雅司（オリンピック）、成田郁久美（オリンピック）、藤田征樹（パラリンピアン）、本橋麻里（オリンピック）

【大臣メッセージ】

テーマ：「東京2020とそのレガシー」

講演者：橋本聖子東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣

【クロストーク】

テーマ：「東京2020を契機としたスポーツ振興と地域活性化」

パネリスト：

橋本聖子（東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣）

小塚崇彦（オリンピック）

林 文子（指定都市市長会会長・横浜市長）

秋元克広（札幌市長）

主催：指定都市市長会

共催：札幌市

猪飼：皆さま、本日は指定都市市長会シンポジウム in 札幌にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。本日の司会進行を務めさせていただきます、猪飼雄一と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

これより簡単に指定都市市長会の紹介をさせていただきます。指定都市市長会は、全国に20ある指定都市で構成している団体です。その始まりは古く、昭和23年1月の横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市による五大市共同事務所の設置にまでさかのぼります。その後、各地の大都市が指定都市で加わり、平成15年12月に現在の指定都市市長会が発足しました。

主な活動としては、各地の連携を図りながら地方分権改革の推進や多様な大都市制度の早期実現に向けて、政策提言などを行っています。詳細は、お手元にお配りしています、リーフレットをご覧ください。

それでは、開演に先立ち、開催都市市長あいさつといたしまして、札幌市長の秋元克広よりごあいさつを申し上げます。それでは、秋元市長、よろしくお願いいたします。

秋元：皆さま、ようこそおいでくださいました。札幌市長の秋元克広でございます。指定都市市長会シンポジウム in 札幌に、こうして大勢の皆さまにお越しいただきましてありがとうございます。今、司会の方からもお話しいたきましたけれども、指定都市市長会としてのさまざまな活動を多くの方に知っていただくこと、そして政令指定都市というものが、どういう役割を果たしていくべきかということですが、形としてはさまざまな分野がございます。

そういう意味では、この市長会のシンポジウムの中で、多くの方々に活動なり役割なりをお伝えしていくということで、全国でこのシンポジウムを開催させていただいているところでございますが、この札幌で開催させていただきますのは、今回が初めてでございます。改めて、開催都市の市長として大変嬉しく思っておりますし、きょうは後ほどクロストークでもお話しいたきますが、指定都市市長会会長の林横浜市長にもお越しいただいております、ありがとうございます。

きょうのシンポジウムのテーマは、「スポーツとまちづくり」ということでございます。この後に北海道出身の、オリンピック・パラリンピアンの方によるトークショー、さらには私も参加させていただきますけれどもクロストークが予定されてございます。大会に参加した方々、オリンピックやパラリンピックに参加をした方であるからこそ語れる、さまざまなお話、貴重な体験、こういったものも伺うことができるのではないかとこのように思っております。

00 : 05 : 16

昨年、ラグビーのワールドカップでわが国全体が非常に盛り上がりました。まさに **ONE TEAM** という流行語も生み出す状況でございましたわけでありましてけれども、このスポーツが持つさまざまな人々が心をつなげて感動を共有する、こういったことがまちづくり

の中にも生かしていけるのではないかというふうに思っておりまして、スポーツの持っている力を生かしながら、まちづくりと連動させていく、こういったことが私どもに課せられた使命の一つではないかなというふうに思っております。

今年、世界最大のスポーツイベントの一つであります、東京 2020 大会が開催をされます。160 日をちょうど切ったところございまして、大変、楽しみで盛り上がり期待するところでございます。この札幌でもサッカーの 1 次リーグの試合、そしてマラソン、競歩の競技が行われます。多くの方々にトップアスリートの競技を見ていただくということはもちろんでありますけれども、世界各国からお越しになった方々をおもてなししていくことで、共に生きる共生社会の実現にもつながっていくのではないかと、このように感じているところでございます。ぜひ、この大会を多くの皆さま方のお力添えをいただきながら、成功に結び付けていきたいと、このように思っております。

加えて、札幌は 2030 年の冬季のオリンピック・パラリンピックの招致を目指しているところでございます。この夏のマラソン、競歩を含めた東京 2020 大会をしっかりと成功させて、2030 年の冬季競技大会の招致につなげていければと、このように思っているところであります。

本日、お集まりの皆さまと共に、きょう 1 日スポーツとまちづくりということについて、一緒に考えて共有していきたいと、このように思っているところでございます。きょうのシンポジウムがお集まりの皆さま方にとりましても、実り多いものになりますことを期待いたしまして、冒頭の開催都市としてのごあいさつをさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。

猪飼：秋元市長、ありがとうございました。では、この後、ステージを転換いたします。今しばらくお待ちください。

【北海道オール・オリンピアンズトーク】

猪飼：それでは、お待たせしました。これより、北海道オール・オリンピアンズトークを始めます。北海道出身のオリンピック・パラリンピアンが語る、オリンピック・パラリンピックの魅力と題しまして、5 名のオリンピック・パラリンピアンによるトークをお楽しみください。

それでは、北海道オール・オリンピアンズの皆さまを、ご紹介させていただきます。鈴木靖様、阿部雅司様、成田郁久美様、藤田征樹様、本橋麻里様。皆さま、どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、ここからの進行は鈴木様にお願ひいたします。鈴木様、お願ひいたします。

鈴木：皆さん、改めましてこんばんは。きょうは北海道オール・オリンピアンズということで、道内に実は 451 名のオリンピック・パラリンピアンがいるんですけれども、中でも私の大好きな、そして私の尊敬している 4 名の方においでいただきまして、そこは笑うとこ

ろじゃないです。これから、トークを始めていきたいと思います。

私は、スピードスケート、サラエボオリンピック日本代表の鈴木靖と申します。鶴川町出身でございます。まず最初に 4 名のオリンピックにそれぞれお話を聞くんですけども、オール・オリンピックズはいつからできたのかということ、それから成り立ちなんかを私のほうで簡単に説明させていただきます。今から、もう 6 年、7 年、8 年前、2012 年になりますけれども、当時の今は大臣の橋本聖子大臣と、これはスピードスケートだけだったんですが、どうも埋もれているオリンピックがいて、素晴らしい経験値を持ちながら、なかなかそういう活動に出てこない選手がいるということで、掘り起こしてこれを北海道のために何か役立てないかということで、スピードスケートだけでオリンピックズの会をつくろうということで立ち上がったのが 2012 年でございます。そのうわさを聞き付けた、ここにあります雅司君がゴールドメダリストですけども、スキーも入れてくれよという話になって、よっしゃ、よっしゃというところで、当時 20 名ぐらいから北海道のために何とかできないかということでスタートしたのが、北海道オリンピックズでした。

これは広告も何もしないで、友達関係で連絡を取り合って、「こんな会をやるからみんな北海道を盛り上げようよ」といって、連絡をして、連絡をして、連絡をして、今は 451 名という形になって、都道府県の中で唯一の会でありまして、これだけの北海道の素晴らしい人材がいるということ、皆さん方も本当に誇りに思っているかなというふうに思っております。

これからは、もう私の話より素晴らしい皆さん方を紹介したいと思っておりますけれども、まず皆さん方は道産子の選手ですけども、最初に自己紹介と併せて、皆さんが体験した、麻里ちゃん、なんか笑っているね。

本橋：自己紹介を飛ばすんだと思って。

鈴木：そうか、飛ばしちゃったか。

本橋：これはいいですか。控室みたいな感じで話していいんですよね。

鈴木：いいです、いいです。

本橋：分かりました。

鈴木：いつものパターンでいい。

本橋：いつもの、分かりました。

鈴木：私も下の名前と呼ばさせていただきますので、よろしくお願ひします。じゃあ、たくさん出ているオリンピックを私も覚えきれないので、雅司君から、すみません、魅力、自己紹介も含めて、よろしくお願ひします。

阿部：尊敬する先輩から指名がありましたんで。北海道オール・オリンピックズは 451 名いまして、きょう来ている 4 名は多分、暇だったんでしょうね。

私は、ノルディック複合でオリンピックに 3 回出場した、北海道の留萌郡の小平町出身の阿部雅司と申します。私は、オリンピックに 3 回出場しまして、特に 3 回目のリレハンメルオリンピックで金メダルを獲得したんですけども、ノルディック複合というか、ノル

ディック競技はノルウェーでいうと国技なんですよね。日本でいう相撲みたいなもので、その国技で髪の毛が黒いアウェーの僕たちが勝つというのは、絶対に心の中じゃ嬉しくないはずなんですよね。そのアウェーで僕たちが活躍しているのに、ノルウェーの人方は温かく応援してくれて、僕たちが勝ったのを一緒になって喜んでくれて、なんかノルウェーはすごいなと、大きいなというふうに感じたんですよね。これがオリンピックの良さだなというのを、すごい感じまして、もし札幌でオリンピックが開催されるんだったら、日本人だけを応援するんじゃなくて、やっぱり、頑張っている結果を出した人を素直に喜んであげたいなというふうに思ったんですよね。感動したんですか。

鈴木：感動しました。頭に何回聞いても、と付けてもいいですか。

阿部：はい。

鈴木：何回聞いても感動しました。ありがとうございます。じゃあ、次に大懸郁久美さんと成田郁久美さん、両方の名前でもオリンピックに出たんですよね。よろしくお願ひします。

成田：こんばんは。バレーボールをやっていました、成田郁久美といいます。旭川出身で、オリンピックは96年のアトランタ、それから2004年のアテネの2大会に出場させていただきました。私は、オリンピックの本大会自体のときは試合をやったという形で、そんなに外に行く機会というのはあまりなかったんですけれども、その事前合宿で結構アテネにも入って、そこで朝ランニングをしながら観光地ではないところですが、町の町並みを見ながら走ったりとか、あと私はお酒が好きなんですけれども、地元の知らない飲んだことのない、聞いたことのない名前のお酒だったりとか、そういういろいろな文化とか、食文化も含めてですけれども、そういうのを知れたというのは、すごく楽しい経験でもあって、なので札幌もすごく観光名所がたくさんあって、きれいな所、有名な場所がたくさんあるんですが、実際にオリンピックをやることに例えばなつたとして、海外からたくさんのお客さまが来られたときに、有名じゃないけれど、こういう地元のいい所があるんだよというの、楽しみの一つになるんじゃないかなと思って期待しています。

鈴木：ありがとうございます。お酒の好きな郁久美さん、自らも。

成田：居酒屋をやっています。

鈴木：居酒屋をやっています、私もよく行くと言いたいところなんですけれども、まだ。

成田：来る来る詐欺です。来たことないです。

鈴木：来る来る詐欺と呼ばれていまして、「行くからね、行くからね」と、まだ一回も行ってないので、また皆さんで行ってみたいと思います。ありがとうございます。そして、なんとパラで現役、東京を狙っています。藤田君、お願いします。

藤田：皆さん、こんばんは。パラサイクリング、パラリンピックの自転車競技ですね。こちらで選手をやっています、藤田征樹と申します。パラリンピックなので障害を持ってスポーツをしているんですけれども、私は両足の膝から下が義足でして、普段の生活も義足を使ってやっているんですけれども、自転車に乗るときは馬のひづめみたいな、真っ黒いカーボンでできた専用の義足を使って、皆さんが乗る自転車と変わらない競技用の自転車を使って

競技をしています。出身は北海道の稚内市、北海道は言わなくていいですね。稚内市でして、一応、道産子です。ちっちゃい頃は自転車はやっていなくて、スピードスケートをやっています、長野オリンピックのときの清水宏保選手の金メダルというのは、すごく心に残っていて、当時そういう映像も見ながら、オリンピックに出られるかどうか、そこまでは考えていなかったですけども、一生懸命にスピードスケートをやっていました。

きょうは、オリンピック・パラリンピックの活動の場であるオリパラサロンというのが、大倉山のオリンピックミュージアムに開設したということで、やっぱり、オリンピック選手、パラリンピック選手は、それぞれ同じスポーツをやる仲間ということで、フランクにお話をしながら一緒に活動していける場が、北海道に整備されたということは、ものすごく貴重なことだと思いますし、普段からオール・オリンピックズの活動の中で、私も含めてパラリンピックは多くの人と一緒に活動をさせていただいています。今回も、「征樹は来れる？」という一言の電話で「はい」と。

鈴木：すみません。

藤田：これはパワハラじゃないですよ。そのぐらいフランクな提案で、こういう場で活動させていただけるということは、とてもすごく嬉しくて。

オリンピックと同じようにパラリンピックは、東京 2020 が今年開催されて、その後にパラリンピックも開催されますけれども、最初はリハビリから始まったパラリンピックが、どんどん、どんどん競技スポーツ、国と国、選手と選手の戦いの場というふうになってきて、よりいろんな競技のレベルも上がって、競争も厳しくなってというところは、オリンピックと全然変わらなくなってきているんですけども、その中でも、やっぱり、今、巻けというような。

本橋：いいですよ。いいですよ。話してください。

藤田：選手の障害があっても、それに関係なくいろいろ活躍するということは、スポーツマンそのものですし、そういったところを 2020 年のパラリンピックでも見ていただければなというふうに思います。ありがとうございます。

鈴木：ありがとうございます。お待たせしました。麻里さん。

本橋：私ですね。順番が回ってきましたので、北見市出身のカーリング選手をやっております。今は休憩しているんですけども、本橋と申します。きょうは、よろしくお願ひします。あと何でしたっけ。オリンピックの魅力でしたっけ。

鈴木：そうです。

本橋：いつもチームでも一番最後に話すとなんを話すか、何を質問されたか忘れちゃうという癖がありまして、失礼しました。オリンピックで私が印象的だったのは、周りの先輩たちから「オリンピックには魔物がいるよ」とか、「オリンピックはこんな〇〇に緊張する場所なんだよ」と言われていたんですけども、初めて行ったトリノオリンピック、そしてその次のバンクーバーオリンピック、そしてつい最近の平昌オリンピックというふうに 3 度行ったんですけども、どれもオリンピックは温かいなと思ったのが第一印象です。なぜかという

と、やっぱりボランティアですね。現地の世界から来るボランティアの皆さんが、私たちのためにこんなに毎日笑顔で接してくれているんだと、困ったことがあれば嫌な顔をせずに助けてくれてという。私たちは、目標を持ってここにオリンピックに来たけれども、ボランティアの人たちも一緒に、一つの祭典をクリアしようとしてくれているというのがすごく嬉しくて、それで涙ぐんだことがありましたね。

プラス、日本選手団というチームがより大きくなったチームで生活をできる 2 週間が本当に楽しいといえますか、みんなで励まし合ったり喜んでみたりという、本当に目標達成の分かりやすい形だなということがすごくあったので、オリンピックは温かいなというのが私の中での印象ですね。それも皆さんに体感してほしいなというのが願いです。

鈴木: そうですね。ありがとうございます。真面目なお答えをいただきました。ありがとうございます。それで、今は 4 名の方からオリンピックの魅力について語っていただいたんですけれども、いよいよ 2020 東京まで半年になりました。

本橋: 早いですね。

鈴木: 北海道でもマラソンと競歩が開催されます。当然、サッカーのほうも開催されますけれども、阿部さん、阿部さんというのは、雅司君、ごめんね。個人的に注目している種目は何かありますか。

阿部: あります。陸上とかは結構人気でリレーとかは、すごい盛り上がるんじゃないかなと思うんですけど、この札幌で行われるマラソンじゃなくて、僕は競歩をすごく。だって、今はメダルを取る確率がものすごく高いんですよ。それを目の前で金メダルを取る瞬間、それも日本人が取る瞬間を見られるというのは、一生死ぬまで語り継げるじゃないですか。4 年に 1 回は必ず金メダルシーンとかが出てくるし、それを目の前で、それも地元で見られるというのは、二度とないんじゃないかなと思うので。これを言うと見に来る人が増えるから、あまり言いたくないんですけど、僕は競歩を絶対に見に行きたいなと思っています。

鈴木: ありがとうございます。メダリストからメダルを取る確率が高いということで、雅司君は金メダリストですけども、北海道は 21 人ということで、2 位の大阪府 13 個人を断然抜いてメダリストも多いんですね。すみません、ちょっと外れてしまいました。じゃあ、夏のオリンピックで、郁久美さん。

成田: バレーボールの見どころですよ。

鈴木: そうですね。間違えました。見どころをお願いします。

成田: すみません。バレーボールは、すごく今、組み合わせも決まったりとかして盛り上がって、今は合宿で頑張っているところなんですけど、競技のことでいうと、やっぱりメダルを取るとするのは相当に難しいけれども、それを今は一生懸命かなえようとみんなチャレンジしているところで応援してもらいたいんですけど、その中でも今回は久しぶりに道産子の選手が候補というか、入っています。男子の去年のワールドカップでも大活躍しました、リベロをやっています、山本選手という選手がいるんですけど、江別市出身の方で。北海道は、昔はすごくバレーボールが強くて全日本にもたくさんメンバーが入っていたんです

けれども、ここ何年もずっといなくて久しぶりに道民が。

鈴木：嬉しそうですね。

成田：はい。すごい彼はリベロというポジションで、レシーブが専門のポジションなんですけれど、本当に海外の 2 メートル以上あるような、剛速球をびっくりするぐらいコートをはいずり回って拾っていますので、ぜひ山本選手を応援してもらいたいと思います。

鈴木：皆さん、山本選手です。応援しましょう。よろしくお願いします。

成田：お願いします。

鈴木：続きまして、まさに今はもうパラリンピックの準備がどのぐらい進んでいるかという、自分の調整の度合いも含めてコメントいただきたいんですが。

藤田：2020 にぜひ挑戦したいということで、今はまさに予選を戦っているところなんですけれども、まだパラリンピックの自転車競技の日本の出場枠というのが決まっていなくて、今年の 6 月まで最後は世界選手権があるんですが、そこまでが予選のポイントですね。レース上位に入賞するとポイントが加算されるんですけども、それをみんなで積み重ねていっているところですね。私も北京、ロンドン、リオと 3 大会に出場させていただいているんですけども、ぜひ、4 回目は東京にも出場したいですし、そこで一番いい結果にチャレンジできるように頑張っていきたいなというふうに思っています。

パラサイクリングのチームには、今は帯広出身の木村和平選手、視覚障害の選手なんですけれども、同じ道産子が一緒にチームで頑張っていますし、本当に北海道の方から道産子に向けて応援していただける声は、すごく温かいものだなというふうに常々感じていますので、道産子選手だけじゃないですけども、チーム一丸となってしっかり優勝目指して頑張っていきたいと思っています。

鈴木：心強い、また私たちが応援したくなる人ですので、どうぞ頑張ってください。応援しています。最後に麻里さん、麻里さんの好きな応援したい種目。

本橋：今月の頭に柔道の栄養サポートをやっている栄養士さんから、カーリングの私たちのチームは講義を受けまして、そこで簡単に感情移入しちゃいましたね。選手たちがどういうふうに減量をして、どういうふうに栄養を摂っているかという話を聞いて、私たちカーリングは減量することがないので、減量スポーツは冬にもあるんですけども、柔道だと結構マスト金とか、マストメダルというような種目で、選手たちはこういうふうにメンタルと栄養面を調整しながらやっているんだなという話を聞いて、今はそれで頭がいっぱいで、今は柔道の選手、もうそろそろ内定者がどんどん決まるよというのも教えてもらったんですが、今はすごく注目して結果を結構見たりとかしていますね。

鈴木：ありがとうございます。柔道といえば、上野兄弟なんかは北海道出身で有名ですけども、頑張っしてほしいですね。締めくくりに、もうなっちゃいます。

本橋：そんな時間なんですね。早いんですね。

鈴木：早いです。最後は、やはり 2030 冬季オリンピック・パラリンピック、29 日になりますけれども、JOC の理事会で札幌が正式に国内候補市として決定しました。私たちオー

ル・オリンピックズとしても、本当に念願の2030の札幌オリンピック・パラリンピックなんですけれども、逆にいきますよ。麻里さんから、行われる期待、北海道でぜひという心意気を聞かせてください。

本橋：多分、オリンピックに出ることも人生の中では、そんなにはないと思うんですけども、逆にオリンピックを自分の故郷で見られることというのも、人生でそんなにはないというふうに本当に思うんですけど、もし札幌で開催されたら10年後ですよ。

鈴木：そうですね。

本橋：うちの息子も何か狙おうかなと思うというか、親心として見たいけど参加もさせてあげたいみたいな気持ちになってくる親御さんは多いんじゃないかなと思いつつ、結構、周りでもウィンタースポーツをやっている子はたくさんいるので、10年後うちの子はあるかもしれないという親御さんだったり、孫がスケートをやっているかもしれないというふうに、結構、目をキラキラさせた方が増えたなと思うので、そのキラキラが現実になってほしいなと思いますね。

鈴木：そうですね。ありがとうございます。多分、息子さんだったら行けるはずですよ。

本橋：何で行かせようか。

鈴木：札幌がもし実現しますと、2回目のオリンピック、ただパラについては1回目ですよ。初のパラの期待はどうですか。

藤田：そうだったんですね。勉強不足で、そこは認識していなかったんですけども、でも、東京オリンピック・パラリンピックでパラスポーツがどんどん皆さんの目に触れるようになって、今度は冬の開催が決まれば、さらに冬のスポーツも目にさせていただくことが増えるんじゃないかなと思いますし、そうなってくると健常者、障害者関係なく、いろんな方がスポーツを楽しむというところに取り組んでいくハードルというのが、どんどん下がってくればいいなというふうに思いますし、スポーツをやりたいなという障害を持たれている方も、どんどん、そういったところにチャレンジしていけばいいなと思います。

鈴木：ありがとうございます。今は札幌でもアイスレジャホッケー（パラアイスホッケー）とかいろんなところで、パラの体験会とか、そういうのがどんどん増えてきてますので、そういうのも、もっともっと2030に向かって増えていけばいいですよ。じゃあ、夏の郁久美さんから見て、冬オリンピックの開催というのは、どういうふうに見えますか。

成田：やっぱり、道民はみんなそうだと思うんですけども、冬のスポーツに対する親しみというのは、みんな持っていて、私も小学校からずっとバレーボールをやっていましたが、それと並行してスキーとか、スケートに友達と遊びに行ったりとか、やっぱりやる機会、それから目にする機会とかも、多分道民は多いと思う。ただ、実際のプロのすごいオリンピックに出てくるような選手の競技を見るという機会は、なかなかないと思うので、うちも子どもを出したいです。

本橋：同じ企みが浮かぶんですよ。

鈴木：それは、企みですか。

本橋：本音が出ちゃうんですね。

成田：そうなんですよ。でも、子どもたちにとっては、本当にテレビで見るのと違って、生で見たときの音だったり迫力というのは、やっぱり、すごいものがあると思うので、ぜひ見せたいし出したいです。

鈴木：ありがとうございます。じゃあ、雅司さん、意気込み。

阿部：意気込みですね。終わりまで、あと5分あるんですけども。

鈴木：あと4分ですね。

阿部：4分ですね。じゃあ、ちょっと長めにしゃべりますね。

鈴木：いいですよ。

阿部：自分は選手時代、そしてコーチ時代と、ワールドカップ、世界選手権、オリンピックと、約30年間あちこちを回ってきたんですけども、いろんな国に行ったけれど、やっぱり日本、そして札幌が一番いいんですよね。

鈴木：そうですね。私もそう思います。

阿部：ですよ。衣食住の全て何を取っても一番いいと思うし、自信を持って言える都市だと思います。そして、オリンピックミュージアムのある、あの大倉山の上から見た景色は、本当に最高なんですよ。これを、ぜひオリンピック・パラリンピック招致を成功させて、世界中にアピールしたいなというのがすごく今の目標というか、夢なんんですけども。でも、招致を成功させるには、支持率が上がらないと一なかなかうまくいかない。今は、札幌市民の支持率があまり良くないということで、やはりそこは北海道のオール・オリンピアンズで、ぜひ盛り上げて支持率を上げていきたいなというふうに思っていますので、取りまとめをやっている靖隊長、オリンピアンのもとめをよろしくお願ひしたいなと思います。

鈴木：私たちの力で少しでも支持率が上がるように。本当にオリンピックはすごいです。最後に私、話させていただきますけれども。

阿部：締めてください。

鈴木：当然、オリンピックの魅力というのは、その競技の先ほど言った迫力とか、そういうものが生で見られるのは本当に感動するという。そこに運営する役員とか、そういうものが全体的にオリンピックというものを支えて、素晴らしい世界最大のスポーツの祭典ということになるんですけども、私はそれとちょっと離れたところで、実は私と一緒に元働いていた方が、おじいちゃんの話をしていまして、おじいちゃんと真駒内の道路を2人で車で走っていましたと。

おじいちゃんが真駒内の屋外競技場、スケート場の所を指さして、「あのリンク、俺が造ったんだよ」と言ったと。私と一緒に働いていたお孫さんが、「え？」と言ったら「あのオリンピックスタジアムは俺が造ったんだ」と言って、そこを深く何でどうやって関わったのとは聞けなかったらしいです。もしかしたら建設現場の一人かもしれないし、設計の一人かもしれないし、でもそのときにお孫さんは思ったそうです。おじいちゃんは、すげえなというのともう一つ、そういうおじいちゃんに私は誇りを持っているという一言。

なので、オリンピックというのは開催するとか、そこに出るとか、出ないとか、見るとか、見ないとか、そういうところだけじゃなくて、本当に建設から設置に携わる一人一人がずっとレガシーを持っていて、そこに受け継がれていくという、本当に世界最大のスポーツの祭典だなというふうに私は思っています。ですので、この素晴らしい祭典を、ぜひ 2030、この札幌にもう一度呼んで、この札幌をさらに美しい町、すてきな町にしていきたいなというふうに思っています。

最後に私が締めてしまいますけれども、451名のオリンピック・パラリンピアンが一丸となって 2030、それまでは 2020 をまずは成功させて、30 へ一気に突き進みたいなというふうに思っています。これも皆さん方の応援なくしては、絶対に行かないと思いますので、今後とも皆さんの応援をよろしく願いいたします。時間どおり、終わらせていただきます。これでオリンピック・トークショーを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

猪飼：ありがとうございました。皆さん、北海道オール・オリンピックズの皆さまに、いま一度、大きな拍手をお送りください。

【大臣メッセージ】

猪飼：皆さま、お待たせいたしました。それでは、これより大臣メッセージに移らせていただきます。本日は、東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣、橋本聖子様より、東京 2020 大会とそのレガシーと題しまして、ご講演をいただきます。橋本様、どうぞよろしく願いいたします。皆さま、大きな拍手でお迎えください。

橋本：改めまして、皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました橋本聖子でございます。本日は、指定都市市長会シンポジウム in 札幌、スポーツとまちづくり、こうして多くの皆さま方にお集まりをいただきまして、きょうはお招きをいただき本当にありがとうございます。林市長さんにも札幌までお越しをいただきまして、全国の市長会の皆さま方にもお越しいただいているということで、私はこの北海道の生まれ育ちでありますので、私からもお越しいただきました皆さま方に感謝申し上げます。ようこそ、北海道にお越しいただきました。残念ながら、林市長は帰られるんですね。札幌の夜を楽しんでいただきたかったですけれども、とても残念ですけれども、でも私も実は久しぶりに北海道に来まして、きょうは札幌ドームで大運動会の 2 キロの駅伝に出してきました。きょうは、このオリンピックで走ったんですよ。すごく楽しく走らせていただきました。きょうは、この前には大倉山のオリンピックミュージアムでオリンピックのサロンが開設をされたということで、オール・オリンピックズの **まぎ** サロンをつくっていただいたということ、本当にうれしく思います。

私は、鈴木さんと言いついで小さな会を始めていきたい。実は、全国には、今は鈴木大地長官が会長を務める、オリンピックズ協会というのがありまして、歴代のオリンピックの方たちが集まるオリンピックズ協会というのは存在するんですけれども、北海道はそ

れと同時に全体のオリンピックの会をつくっていこうということで、スケートから始まったことですが、スキー、そして夏も冬もということで、オリンピックのオリンピック、パラリンピックのパラリンピアン、そしてスペシャルオリンピック、そしてもう一つはろうあの方のデフリンピックのデフリンピアン、この4つの仲間たちで構成されて、オール・オリンピックズというふうに変えて、今は451人ということで、まだまだ増えるようにしていきたいなというふうには思いますけれども、札幌市さんとはオール・オリンピックズ協会が連携を取らせていただいて、各小学校、そして中学校にも出前授業、オリンピック教育、パラリンピック教育をさせていただくための出前授業であったり、オリンピックミュージアムに来ていただいて、画面を通じてオリンピック・パラリンピックの歴史を学んでいただくというような活動をしていただいております、もうそろそろ全校に、札幌市内は全てに行き渡るようなことになるんだろうというふうに思います。そういった一つ一つの活動というものが、また、2020年東京大会のレガシーの一つとして、2030年札幌冬季オリンピック・パラリンピックに向かっていけるような姿になれば、一番ありがたいなというふうに思っております。

きょうはオリンピック・パラリンピック担当大臣の立場からのメッセージということで、テーマをいただいたわけでありまして、私は運命を今、実は感じているんです。と言いますのも、東京大会は前回の1964年、昭和39年の10月10日がオリンピックの開会式だったんですが、その5日前に北海道安平町という、一昨年に胆振東部の大地震がありましたけれども、その一つであります安平町で生まれ育ちまして、スピードスケートをやっていたんですけれども、私の父は元気で今も頑張って牧場におりますが、その父がオリンピックの開会式をどうしても見たいということで、大変なプレミアムチケットを2枚手にすることができて、そして東京大会の開会式に見に行っていたんです。

それで、あの最終ランナーの広島県出身、そのときのコンセプトの一つが平和の祭典オリンピックですから、原爆投下された唯一の被爆国であるこの国から平和の火を灯そうということで、広島か長崎の出身者の方を最後のランナーにしようということだったんですね。そして、結果的には広島県三次市出身の坂井義則さんが大抜てきを受けるんですけれども、あの広島に原爆投下されたその日に生まれた方ということで、19歳のランナーが最後のランナーとして競技場に入ってくる。うちの父とおばあちゃんは、なんと坂井さんが上がってくる階段のすぐそばに席があって、大感激をしていたそうなんです。生後5日の私の顔も見ずに、その日に千歳空港から飛び立ったんですね。子どもの顔はいつでも見られるからということで引き返すこともなく、携帯電話もないですから空港で電話をしたら無事に産まれたということが分かり、「そうか、良かった」と言ったというんですね。それで、5日間、東京見物をしながらおばあちゃんと楽しんで、楽しんで、全然、私のことを考えていない。

そして、坂井さんが入ってきて、今は新国立競技場ができて取り壊されましたが、前の国立競技場のあの真ん中の聖火台に火が灯された瞬間に父は何を思ったか。これを言い聞か

されて私はずっと育つんですけれども、「あの競技場の聖火台の火がともったその瞬間、あの聖火台の炎の中におまえの顔が浮かんだ。」と母は言っていました。ずっと言っていました。「見もしないで行ったくせに」というふうに言っていたんですけれども、でも、生後 5 日でやっと私の名前を付けてくれまして、オリンピックの選手になるようにと聖火の聖の字を取って聖子になりました。

そして、小学校 1 年生の冬、札幌冬季オリンピックを見ることができて、うちの父が連れてきてくれましたときに、真駒内競技場のあの聖火台の火を見ながら、「おまえの名前はここから付いたんだ」ということで、スピードスケートでオリンピックの選手になるということを決意いたしまして、結果的に冬のスケートで 4 回、夏の自転車で 3 回ということで、合計 7 回ラッキーにもオリンピックとして出場を果たすことができました。

そして、私自身のライフワークのような形で、このオリンピック・パラリンピックにずっと携わりまして、スケートの会長、あるいは自転車の会長、そしてオリンピック委員会の強化本部長であったり、副会長という立場で実は選手と合わせると 18 回経験しました。オリンピック・パラリンピック、そしていよいよ今度は、今年ということになるんですけれども、いろいろ携わって団長職もやりました。バンクーバーとソチと前回のリオデジャネイロ、ロンドン副団長だったんですけれども、団長を 3 回。まさに断腸の思いを 3 回もしまして。でも、本当に大変だったなというのと同時に、非常にいい経験をさせていただいたなというふうに思っております。

実は、一番、自分自身の財産になったオリンピックは全てなんですけれども、最後の選手として出場したアトランタ、このオリンピックは非常に勉強になった。なぜかというふうにありますと、諦めが悪い人間なものですから、最後にオリンピックのアトランタを目指そうという、31 歳で迎えるアトランタを控えているときに、私の義理の兄が、この北海道選出の衆議院議員だったものですから、あの兄の跡を継いで衆議院議員になるという準備は、実はしていた時だったんですけれども、その噂を聞き付けた、今は組織委員会の会長であります、森喜朗会長が「こちらのほうがいいぞ」ということで、参議院の全国区に誘いをいただきまして、それであればぜひということだったんですけれども、「来年のオリンピックを目指しているので、その後の 3 年後の会期にしてもらえませんか」と言ったら、「それはなかなか難しい」というふうに言われましたので、「じゃあどっちも目指しますがいいですか」と図々しく言ってしまいまして、結果的にももちろん日中は政治活動、そして深夜と早朝の時間をかけて、自転車の全日本選手権を約 10 カ月間両立を目指しまして、アトランタオリンピック大会は 7 月の開催でしたけれども、5 月の全日本選手権のトラック競技で優勝することができて、まず出場権を取りました。

でも、国会が延長になると諦めなければいけなかったんですが、ちょうど 6 月に閉会をいたしまして、そして 7 月のアトランタ大会に選手として出場を果たすんですけれども、オリンピックの基本というのは、する人がいる、そして見る人がいて、支える人がいる、こ

の三角形をしっかりと描いていくことこそが、スポーツの基本だといわれているんですけども、私は最後のアトランタの大会はする人であり、そして政治家として行くもんですから視察だったり、あるいは自分の競技が終わってから滞在している期間は、アメリカの国会議員と、私自身も国会議員なので、オリンピック・パラリンピックのこの後のレガシーとか、事前のこととか、そういうスポーツ、まさにまちづくりや国づくりというものは何なのか、文化というものは何なのかということ、国会議員として話をするという機会をいただいたり、あるいは支えるほうも大事ですから、どのようにしてアトランタ大会は準備をし、そして次につなげていくのかというようなことも勉強させていただき、最大のチャンスだったなというふうに思います。

特に私の最後のアトランタで思い出ということではないんですけども、怖い経験は何といっても選手村のダイニングですね。食堂のすぐそばに置いてある、どこにもたくさん置いてあるダストボックスですけども、ゴミ箱、その中に爆弾が仕掛けられておまして爆発したんです。そして、死人は出なかった、ちょうど成田さんが一緒に出ていた、あのオリンピックのときに爆発したんですよ。選手村の中のテロで死者は出なかったんです。でも、オリンピック広場と言われる、アトランタの中心部にある広場では爆発が大変大きくて、そして数人の死者を出したというような、これからのオリンピック・パラリンピックはテロとの戦いでもあるというような状況が、だんだんと見えてきた大会だったんですね。

そのときに、これからのオリンピック・パラリンピックというものを、どのように選手の安心・安全、そしてどういふふうにして文化として発展させていかなければいけないのかということ、を学んだオリンピックが、私の最後の選手として出場したアトランタ大会だったということなんですけれども。

一つ、きょう政令指定都市の皆さんがお集まりということもありますので、これからのスポーツというものと、どのようにまちづくりや、あるいはいかに心豊かで持続可能な社会をつくり上げていくことができるかということに関して、私なりの経験で一つの提案といたしますか、そういったものを大臣という立場と同時に、今までの経験からして、ぜひお願いをしたいなということ、あと最後の20分の中でお話ししたいと思うんですけども、実は7回のオリンピックに出た選手は、さぞかし頑丈な体だったんだろうと。当然、太ももが一番太いときは63センチでしたから、普通の女性のウエストより1本の太ももが太かった。それは、自転車のスプリンターだったときですね。スケートはあんなに太かったら駄目なんです。なぜか。短い足で63センチもあればコーナーができませんから、本当にそうなんです。コーナーができないので、私がスケートのメダルを取ったときは最後55センチの太ももにして仕上げていました。

自転車のスプリントはソウルのときだったんですけども、これは63センチまで大きくして、短距離の戦いだったので、そういった体づくりをしてきたんですけども、そういう足だったからこそ当然、頑丈な人間だと思われていたと思うんですが、実は小さい頃からず

っと病気を持っていました、それが表れてきたのが小学校 3 年生の後半、最後 4 年生になる直前ですね。急性腎炎になりまして、そして 2 カ月間の入院生活をして、そして再発を避けるために小学校が終わるまで、これはスポーツとは無縁の生活をしました。そして、その後、少しずつ復活ができて、高校に入る直前の中学 3 年生には、全日本のジュニアまで出られるように体も回復したんですけれども、そして高校に行きました。駒澤大学附属苫小牧高校、全道各地から優秀なスケーターが集まる高校でもありまして、切磋琢磨(せっさたくま)されて、どんどん成長して高校 2 年生で全日本のチャンピオンになってしまいました。

そうしましたら、周りは家族も含めて、もう完全に病気は治ったんだというふうに思ってしまう、そこから 1 年もしないうちに検査も何もやめてしまいましたので、とにかく 1 年半後にサラエボという靖さんが出た一緒のオリンピックですけれども、そのオリンピックに、もう全日本チャンピオンになっているので確実に出られるんだというふうに思いながら、一生懸命に高校 3 年生の春から夏にかけて、全力で苦しい、厳しいトレーニングに挑んでいったんですけれども、そうしましたら、なんと秋に体がむくみ始めまして、これはおかしいというふうに自分が気付いて良かったんです。それは、小学校のときのあの体験がありますので、もしかして、まさかと思いながら小学校のときに入院していた、苫小牧市立病院に行きました。即入院だったんです。結果的に、このままではとても体が持たないし、オリンピックどころじゃないというふうに言われまして、尿タンパクの量が異常に上がっているということで入院をしたんですね。

でも小学校のときと違うのは、腎臓病という病気は、そんなにすごいひどい大変な病気なのかということ、高校 3 年生ですから調べちゃったんですね。自分で勉強したんです。どんどん恐ろしくなりまして、それが結果的に PTSD、当時その病名は付いていなかったもので、ストレス性呼吸筋不全症というふうに診断書に書かれましたけれども、自分自身が怖くなってストレスがたまって、結果的に胸の筋肉に障害を持ってしまいました、いまだに深呼吸ができないものですから、ずっと腹式呼吸だけで生きている。これは、選手のときからずっとそうなんです。でも、そういうふうな体であれば、体はそれに応えるしかないので、ずっと腹式呼吸だけで生きてきておりますけれども、肺活量は 2,000 ちょっとしかなかったですね。最大 2,400 までだったんですけれども、病気をした直後は 800cc まで落ちました。ずっと腎臓病の治療で入院しているのに酸素マスクを付けて、苫小牧の市立病院ではこんな患者さんは見たことがないと言われまして、そして札幌の病院にすぐ転院させられまして、札幌で入院していたんですけれども、でも、そこで病は気からということを学びました。

当然、腎臓は腎臓病のケアをするんですけれども、呼吸筋不全症というのは自分自身のストレスを解消することができない中で病気になったものですから、まずは心療内科、当時の精神科病院に入りまして、そしてメンタルトレーニングを毎日、毎日。怒りをどうするかではなくて、もともと人間が怒りというものが体の中に発生しないように、どのように自分を

コントロールするかというトレーニングを受けるんですね。私は結構、穏やかな人間だと思われていると思います。アスリート時代からも、まあまあ、そうですね。それは、病気のおかげなんです。かあつとなったり、ストレスをためると、腎臓の数値が悪くなるんです。このときに始めて分かったんですけれども、続発性慢性腎炎ということで、生まれ持って何かにストレスがたまる、あるいは風邪や病気、けがをすると腎臓に負担が掛かってしまいやすい体ということが、そのときに初めて分かりました。

そして原因が分かったので、当然、そういったストレスをためないような訓練をすることによって、安定した数値を保ちながら今も腎臓と付き合っているという状況なんですけれども、一つ余計なものが付いたんです。高校 3 年生の札幌での入院中に医療事故に遭いまして、B 型肝炎です。大変だったんですよね。そのときにも、もうどうにもならないということで、ずっとキャリアで来ていたんですけれども、やっと 3 年ぐらい前、毎年のドックに入りながら、腎臓と肝臓のケアをずっとしてきたんですけれども、やっとキャリアではなくなりまして、これも医学の力といいますか、本当にありがたいなというふうに思いながら、それでも今もずっとそのケアをするために血液のクレンジングという、ドイツの民間療法なんですけれども、私は一番それが今は合っていて、血液クレンジングという透析の一手手前ですね。自分自身の血を抜いて、それはオゾンで、これが全部の方にいいかどうかは別として、私には一番合っている療法をやっと見つけることができました、数年前から血液クレンジングというオゾン療法をやって、また自分の体にその血を戻していくというやり方で、民間療法なんですけれども、これをやりながら今もこれだけ元気であるわけなんですけれども。

高校 3 年生のときに退院して、1 年半後のサラエボにやっと間に合うんですけれども、実はものすごい薬の量でした。その当時は申請をして良かったんです。それは、私自身の体がそういう診断を受けるので、生きるために必要だということで仕方なかったんですけれども、そこから今度は 4 年後のカルガリーに出場するんですが、カルガリーのときには腎臓の数値も肝臓の数値も実は良くなっているときがあるので、絶対に薬はもう申請できないというふうになりまして、目指すのであればこの薬を飲まないような体にするということが絶対条件でありました。そして、サラエボからカルガリーまでの中の 3 年間で、完全な予防医療・予防医学を徹底してチーム医療を組んでもらいまして、これは富士急行の堀内光雄会長という方が、大変素晴らしいオーナーで全面的にバックアップをしてくれまして、体質改善を試みて薬の量を IOC の反ドーピングコントロール機関が認める薬だけで復活することができまして、その薬だけは飲み続けましたけれども、ドーピング違反にはならず 7 回連続で出場することができたのです。

私はそのことの思いがあるものですから、12 年前になりますけれども、25 年前に国会に出たんですが、ライフワークはスポーツと健康、食。これをずっとやってきて、やっとたく

さんの先生方の応援団をいただいて、12年前に国立のスポーツセンター、合宿所ですね。今は東京都北区にありますけれども、その完成に何とかこぎ着けることができました。そして同時に、その隣にスポーツ医科学情報、そういった研究所をつくることができました、今は両輪のように回っているものですから、日本の選手たちの活躍が大変大きなものになっていったということなんですけれども、昔は本当にそういったものがないのと同時に、合宿所とか遠征というのは単独でそれぞれが場所を決めてやっていたので、交流がなかったんですね。

これは非常にもったいないことでもあったんです。オリンピックに行って、冬のオリンピック、夏のオリンピック。でも、昔はオリンピックに行ったときに結団式で初めて会う選手たちばかりだったんですね。今は、もうみんな顔見知りになったのは、ナショナルトレーニングセンターで、全ての競技が冬も夏も合わせて一堂に会して、寝るところも同じ、練習のメニューは違うのでそれぞれトレーニングセンターでやっていますけれども、でも夜の時間は共有しますので、その共有する時間を見計らってアカデミースクールをつくって、あるいは監督、コーチ、スタッフのための授業を展開して、今は企業で言う当たり前のことですが、スポーツの異業種交流をこの12年間やってきたんですね。

そうするとこの部分でのいいノウハウを、この競技でも生かしたほうがいいんじゃないかということで、いろいろな人材の交流をすることによって、非常にいい状況になってきた。例えば、体操の競技に陸上のトップコーチが合宿に行くんですね。そうすると、どういうふうになるか、跳馬ですか。跳馬にたどり着くまでに何メートルかありますよね。そのときに、いかにトップスピードに上がるかという、陸上のスプリンターの専門家が付くことによって、一気にそのスピードが体操の選手は上がると。そうすると、ほんのちょっとの違いであったとしても、高く遠くに飛んで空中にいる時間が、ほんの0点何秒長くなる。そうすると、そこに一つ技が入るというんですね。それによって、最初の技のポイントを高くするための、この演技をやりますということのポイントを、最初から高くすることができるということであったりとか、たくさんいろいろな交流を図ることによって、選手たちのレベルを上げてくることのできたわけなんです。

その中でスポーツドクターが集まってくださって、そして私たちの体を見ていただく、そのときに、きょうは藤田選手にお越しいただいておりますけれども、もともとはスピードスケーター、私と同じ競技をやって、事故によって両足の膝から下ですね。私も、ずっとトレーニングを、自転車競技連盟の会長ということだったものですから、ずっと一緒にやって強化に携わらせて、お付き合いをさせていただいているんですけれども、すごいなというふうにやっぱり思います。そして、その研究を医科学サポートセンターでやられるようになったんですね。そこで、さらに今は非常に高いレベルの研究を、あらゆる大学と組んでやらせていただいている。

その中で最近、脳科学で眠り方の研究。これを突き止めていきますと、なんと筋肉の疲労と脳の疲労が完全一致するということが研究でわかったんです。考えてみると、どこかに

疾患を持っている、心臓に疾患を持っていたりとかというのは全く別として、筋肉の疲労をさせるためのトレーニングですから、そうすることによって栄養と休養を与えて、寝ている間に筋肉というのはつくり上げられるんですね。栄養と休養がなければ筋肉というのは絶対に太くなってこないの、そういう研究が目に見えているので、練習が終わって20分以内の間にタンパク質を取らせないと、筋肉の補充が遅れていくものですから、食べる時間も研究もできているので、非常にいい効果が上がってきたということなんです。

そういう中で筋肉の疲労というものはどこから来るか、脳の疲労、そうすると筋肉に疲労を毎日、毎日、疲労困憊（こんぱい）になるまでトレーニングをしても、世界的に世界中でどこかに疾患がない限り、筋肉の疲労によって過労死した人は一人もいないんです。でも、脳の疲労によって過労死はあり得る。自殺もあり得てしまっている。これは、してはいけないことなんですけれども、こういったことは防げなければいけないんですけれども、確実に起こってしまっている事実なんです。これをスポーツのメカニズムから紐解いていきましたと、簡単ではないんですけれども、脳が疲労していない選手はどうやって回復することができるかということで、その大学とマットレスの会社と組みまして、脈拍を付けて、脳にセンサーを付け、マットレスの下にセンサーを引いて、そして、どういう精神状態で眠りについた人は、どれだけ眠り方が上手か、下手かという研究ができてきたんですね。

そうすると筋肉の疲労があっても、しっかりと脳がリフレッシュされて、あしたに向かっていこうというふうにして整理がちゃんとしている選手は、翌日の血液の中の乳酸値というのは、除去されているスピードがものすごく早いということが分かったんですね。悩み、悩んで寝ている選手は、何時間寝てもレム睡眠、ノンレム睡眠のサイクルがものすごい狂ってきているので、何時間寝ても疲労は取れないんです。4時間寝ても、6時間寝ても、すっきりと目覚める選手というのは、疲労を非常に取ることでできているということで、完全に脳と筋肉の疲労は一致していることが、この研究で分かったものですから、私は強化本部長のときに、これをさらに紐解いていこうということで、障がい者の選手とオリンピックの選手との違いということで、これをドイツが大変な最先端に行く研究をしているんですね。

そこで、オリンピックとパラリンピアンに脳にセンサーを付けさせていただいて、それがどういう状況で脳は動いているのかということの研究していただいたことで、講義をしてもらったんですね。そうすると面白いという申し訳ないんですけれども、非常に面白い結果。健常者のオリンピック、オリンピック選手のほとんどは超トップレベルでない限り、なんと一番刺激を与えているのは左脳だけだったんですね。運動をつかさどる左脳。そして、藤田選手のようにパラリンピアン選手の脳にセンサーを付けさせていただいたら、ある程度のレベルまで、こちらは超トップ、でもパラリンピアン超トップではなくても、なんと右脳も左脳も前頭葉も均等に刺激して運動しているということが分かったんですね。

これの一つ意味するところは、健常者のオリンピック選手は、自分自身の能力に甘えているだけだということが分かったんです。これは、結果的に左脳で運動ができてしまうから、

本当の自分自身の持つ治癒能力を引き出さない。自分自身が本当に持つ能力を引き出していないということに気が付いたので、脳トレをするようになったんですね。そうすることによって、ものすごく発達してきまして、そして大体脳科学者に聞きますと、前頭葉というのは25歳ぐらいから成長するというんですけども、そんなことはないそうです。しっかりとトレーニングをして、自らを鍛えようという自分自身を出していくことによって、あるいはパラリンピアン選手のように障害を持ちながらも、自らを切り拓いていこうという気持ちになった瞬間に、右脳は働くというんですね。そして、藤田選手もそうですけれども、私はいろんなパラリンピアンに聞きました。もともとあった足がなくなる、腕がなくなる。でも、脳はずっと分かっているんで、なくなった足や腕の先まで感覚が分かる。これは、右脳でなければ分からないらしいんです。そうですね。絶対そうですから。それを知らず知らずにやっているから、これだけすごい選手になれるという。

そのことによってスピリチュアルとか、科学技術、芸術文化というふうな、右脳が発達せざるを得ないそうなんです。それによって冷静な判断をしなければいけないという前頭葉が発達をしてきて、そしてパラリンピアンというのは、あれだけのことができる。そのことをしっかりとマスターをすることによって、実は結果的にオリンピックの成績が良くなっているんです。これは私自身が強化本部長のときに、パラリンピアンから学んだことを、そのままオリンピックにどのようにしっかりと明確に伝えていくか。今は、やはり選手たちというのは、医科学的な根拠に基づいて説明をすることによって、日本の選手は真面目なものですから、今は休みなさいと言っても、なかなかさぼりたくないと思ったりするんですね。でも、朝に起きて自分自身の一番低い脈拍が、ちなみに私は中距離、長距離タイプだったので、一番低いときの脈拍というのは1分間に45でした。これが鍛えていくと200まで上がるんですね。こうやって短距離選手というのは、1分間に大体60ぐらい打つ人もいますけれども、でも朝目覚めたときにその頻拍数より10拍以上とか多くなって目覚めると、疲労が取れていないということなのでやっても無駄なんですね。

これをスポーツ医科学センターができたことによって、科学的な根拠を基に休むときはしっかりと休む、食べるときは食べる、寝るときは寝るというふうにして研究をした成果を、選手たちは自分自身が学んでいるものですから、ものすごく効率のいいトレーニングをするようになりました。そして、そこに付いているスポーツドクター、これは全ての分野のトレーナーが、お医者さんが付いてくださっているんですけども、そこで話したいのは、スポーツドクターが私たちに付いてチーム医療を組んでもらう。全力で予防医療・予防医学だけがをさせない、病気をさせないというふうにして頑張ってもらえるんですね。ドーピングがあるから薬は飲ませられない。こういう方たちが地域医療に帰るとすぐ薬を出すんです。これは、医者としてさぼっていないかと、いつも言うんですね。でも、診療報酬は、そこで私は変えていったほうがいいと思うんですけども、やっぱり対症療法というのは

スポーツの世界にはあり得ないんです。町を挙げて、国もそうなんですけれども、やはり都市を挙げて市町村が、それぞれの地域医療を考えていくときに、対症療法ということではなくて、地域の医療というものを完全な予防医療・予防医学と、健康寿命を延伸するという視点で医療というものを確立していくことによって、そして今、私たちがスポーツを中心に医療や福祉や介護や、あるいは素晴らしい食文化、地場産業、芸術、伝統、教育、そして環境や観光というものを、あの三角の点から、一つ一つの産業を詰めていって、SDGsの丸を描いて、そして新しい産業を構築させて雇用を生んで、今までにない私は経済というもの、産業というものを築いていく、そのことの姿が実はオリンピック・パラリンピックなんですね。

これから、いかに心豊かで持続可能な社会をつくり上げていくということは、過去に例を見ないオリンピック・パラリンピック、そして成熟した国家としてやるべき姿というのは、世界が注目をするこの東京大会や、あるいはそのレガシーとして札幌大会というふうになっていくことによって、ただ単にオリンピックというのはスポーツの祭典ではなくて、今この地球上が抱えている温暖化であったり、あるいは食の問題や感染症の問題やエネルギーの問題。そういった世界が直面する大きな課題に先進国家として、東京大会を機に全てのこの問題を科学技術や、素晴らしい日本の心文化というおもてなし文化も含めて、問題を解決するための最大限のヒントというものを、この大会でしっかりと世界に発信をする、それが私は東京大会の役割だと思っております。

東京オリンピック、56年前の経済大国になっていく日本の姿の起爆剤になった東京大会とは、また違った姿を描いていかなければいけない。いかに心豊かで持続可能な社会をつかっていく、そのレガシーを、この東京大会で担当大臣として、しっかりと医療やあるいは食、スポーツ、全てにおいてトップランナーとなる日本である姿を目指していくためにやっていきたいなというふうに思っております。

ちょうど時間がまいりましたので、終わらせていただきますけれども、スポーツとまちづくり、まさにスポーツということだけではなくて、国家の威信を懸けた経済と、そして文化力の戦いに変えるということに、スポーツを置き換えていく時代がもう来ました。そのことを、ぜひ各指定都市の皆さま方に、それぞれの都市でのスポーツと健康というものを、まちづくりのテーマとしてやっていただくことによって、持続可能な社会をつくり上げていくことになるなというふうに思っております。私も全力を尽くして担当大臣として頑張っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。きょうは本当にありがとうございました。

猪飼：橋本大臣、ありがとうございました。

【クロストーク】

猪飼：皆さま、お待たせしました。それでは、これよりクロストークを始めさせていただきます。まず、トークに参加していただく皆さまを、改めてご紹介させていただきます。まずは、先ほど素敵な大臣メッセージをいただきました。東京オリンピック競技大会、東京パ

ラリンピック競技大会担当大臣、橋本聖子様、オリンピックを代表してフィギュアスケートで2010年バンクーバーオリンピックに出場されました、小塚崇彦様、指定都市市長会会長、林文子横浜市長、秋元克広札幌市長、以上の4名の皆さまとクロストークをさせていただきます。進行は、猪飼でお伝えしていきます。着席させていただきます。

クロストークのテーマは、東京2020を契機としたスポーツ振興と地域活性化についてです。東京2020を契機としたスポーツ振興と地域活性化、この東京2020を軸に大会前、大会に向けて、大会後のその先のレガシーと、大きく3つのパートに分けてお話を進めていきたいと思ひます。

まずは、指定都市市長会の会長でいらっしゃいます、林横浜市長にお願いしたいと思ひます。林市長、これまで横浜で開催された大規模な国際スポーツ大会について、ご紹介いただけますでしょうか。

林：改めまして、皆さま、こんばんは。横浜市長の林文子です。本日は、素晴らしいシンポジウムに出席させていただき、秋元市長、ありがとうございます。北海道オール・オリンピックズの方のお話が、とても楽しく素敵でした。また、橋本大臣から素敵素晴らしいお話を伺い、とても感動しております。

それでは、横浜市の国際的なスポーツ大会についてお話をさせていただきます。横浜は数々の大会を開催していますが、代表的なものの一つは、世界トライアスロンシリーズ横浜大会です。横浜が開港してから150周年のときに、何か記念になることをやろうと考えたのが、きっかけです。世界トライアスロンシリーズは、世界各国で連戦を続ける、有名な大会ですが、日本は参加していませんでした。横浜開催のお話をいただき、おかげさまで2020年で11回を数えることとなります。

最初は、ご覧になる方も30万人を切っていましたが、続けることがとても大事で、今では46万人を超える皆さんが沿道を埋め尽くし、このシーズンの風物詩になりました。そして、横浜市は、花と緑に囲まれた街にするため、「ガーデンネックレス横浜」というイベントを開催しています。花や緑にあふれる中、大会を開催できるようになり、楽しい催しになっています。横浜の美しい街並みをバックに世界190か国に映像が配信されていますので、シティセールスにもつながっていると思ひます。

そして、パラトライアスロンシリーズも開催しています。横浜は、パラリンピックに先駆け、2014年に国内で初めてパラトライアスロン競技を開催しました。アジアで唯一のシリーズ開催都市であり、3年連続で開催している世界で唯一の都市でもございます。パラアスリートとボランティアの皆さん、子どもたちが触れ合って交流を深めることで、障害のある方もない方も、一緒に、心豊かな社会を作っていきたいと思ひています。それから、日本の12の都市で開催いたしました、ラグビーワールドカップ2019です。横浜は、準決勝、決勝を含めて66つの試合を開催する予定でした。1試合は、台風で残念ながら中止となり、全部で5試合開催いたしました。プール戦の最終試合、日本代表が勝てばベスト8に進出できるという重要な試合で、台風19号の影響により開催が危ぶまれる状況となりました。横

浜国際総合競技場、通称日産スタジアムは高床式で、下の駐車場に水が流れる仕組みになっています。近くを流れる鶴見川は、暴れ川と言われていまして、氾濫しやすい川ですが、この時は、鶴見川の水をスタジアムの下駐車場に引き、浸水被害を免れることができました。その後、朝4時頃から関係者が一丸となって、対応を進め、無事に歴史に残る日本代表ベスト8が決まった試合を開催できました。本当に、ありがたいことでございます。

決勝戦は南アフリカとイングランドでしたが、観客動員数は、スタジアムができてから過去最多となる7万103人でした。今後も、この記録は簡単には破られないのではないかとされています。選手の皆さん、ボランティアの皆さん、世界各国からいらした観客の皆さん、すべての方々とONE TEAMとなり、街が一つになったようございました。本当にスポーツの力を感しました。以上です。

猪飼：市長、ありがとうございます。先日のラグビーワールドカップの熱気は、会場にいらっしゃっている皆さまも、まだご記憶が新しいかと思えますけれども、続きまして秋元市長に伺いたいと思います。札幌市では、1972年に冬のオリンピックが開催されましたけれども、このオリンピックというのが札幌市のまちづくりに、どのような影響を与えたのかご紹介いただきたいと思えます。

秋元：きょうは、多くの皆さんにお越しいただきまして、ありがとうございます。また、先ほど橋本大臣から素晴らしいお話をいただいて、ありがとうございます。1972年に札幌で、アジアで初めての冬のオリンピックが開催されました。このときは、パラリンピックは夏の大会ではあったんですけども、冬の大会ではまだ札幌大会のときにはありませんでした。つまり、72年のときは冬の競技では、まだオリンピックだけという時代でありましたけれども、ここに今は3つ、冬季オリンピック72年のレガシーとしていわれているものを3点掲げております。一つは、この札幌の街が大きく発展したきっかけになったということであります。地下鉄だとか、高速道路、そして、さまざまな都市インフラというもの。千歳空港の国際化というのができたのも、このオリンピックがきっかけです。そういう意味では、今は札幌にある多くの都市インフラというものは、この時にできた。札幌の発展が20年早く進んだというふうに言われるぐらいであります。

2つ目が、国際的に札幌の名前が知られるきっかけになったことでもあります。それまで札幌とは「どこ？」というぐらいの感じだったわけですけども、ちょうど2月に冬の大会が開かれましたので、「さっぽろ雪まつり」というのがこの時期に行われまして、実は開幕前の1週間くらい前に雪まつりを開催しました。本当に今でも多くの方に来ていただきますけれども、この大雪像が札幌で雪まつりというのがあるということを知られるきっかけになったのが、この札幌オリンピックです。まさに、札幌という名前が国際的に知られて、ここで雪まつりということが国際的に知られるようになったきっかけ、そのことがその後のさっぽろ雪まつりは、今はもう世界中の方からスノーフェスティバルに行ってみたくらいというふうに言っただけのような、そういうお祭りになった、きっかけになったわけです。今でも、ホワイトイルミネーションとか、いろいろな大通りのビアガーデンなんかもありま

すけれども、札幌が国際的に知られるきっかけになったのが、72年のオリンピックだというふうに思います。

3つ目が、ウインタースポーツ環境という意味では、このときにいろいろな施設が造られました。先ほどのお話にもありました、真駒内のアイススケート競技場とか、それから大倉山も宮の森も改修といいですか、このオリンピックのためにオリンピック施設として改修されましたけれども、それが今でも使われております。大倉山のジャンプ競技は、今でも毎年ワールドカップ、世界選手権なんかも行われておりますし、夏はそこでもサマージャンプも行われておりますけれども、観光施設として多くの方に来ていただいています。そういう意味では、ここにレッドブルの開催とありますが、ジャンプは上から下りてくるんですけれども、この大会は下から上に上って走っていくんですよ。こういう形でオリンピック施設ができて、それが使われている。

札幌ドームも72年のオリンピックの時にはありませんでしたけれども、ここに2007年の世界選手権のときに札幌ドームの中に雪を入れて、クロスカントリーの競技が行われました。ここは本当に多目的な競技場となっております。あとはスキー場も手稲山、ここで回転なんかも行われましたので、こういったさまざまな冬の競技をできる施設というものができて、札幌が世界中に知られるきっかけになった。それが、今でも使われているというレガシーになっているかなと思います。

猪飼：ありがとうございます。この夏のマラソン、競歩、そしてサッカーの予選とさまざま開催されますけれども、そうしたところも、またレガシーとしてさまざまな形で残っていくのかと思います。さて、ここからのお二方は、アスリートの立場からお話をいただきたいと思います。小塚さんは、オリンピックアンバサダーとして2010年のバンクーバーオリンピックに出場されて、現在はJOCのオリンピックアンバサダーをお務めになっておりますけれども、どのような取り組みをなさっているのでしょうか。

小塚：改めまして、JOCのオリンピック・ムーブメントアンバサダーを務めさせていただいております小塚と申します。よろしく申し上げます。私自身は名古屋の生まれなんですけれども、なぜここにいるんだという皆さんもお思いだと思いますけれども、私、去年は15回札幌に飛んできました。札幌の魅力にすごく惹かれて、札幌をもっとスポーツを通じて発信できるんじゃないかなという思いで、今は活動させてもらっています。

アンバサダーとしての活動としては、オリンピック・デーランやオリンピック教室ということで、オリンピックの魅力だったりとか、あとはオリンピックはどういった思いで開催されているのか、そういったところを中学生や、そしてオリンピック・デーランではたくさんの方々、約1,000名の方々に会場に来ていただいて、実際に一緒に体を動かしながらスポーツの良さ、そしてオリンピックの良さを感じていただく。

一つここで質問したいと思うんですけれども、皆さん、オリンピックのマークを今、書けますか。いかがでしょうか。オリンピックのマーク。オリンピックのエンブレム、五輪のマークがあると思うんですけれども、それを書いてくださいと言われて書ける方はいらっしゃ

やいますか。いかがでしょうか。意外と見ているようで見ていない、書けなかったりと思うんです。どこが重なっているのか、色がどこにあるのかだったりとか、そういったところ、まず書くのは難しいと思うんです。そういったところを中学生に質問すると、大体は四輪でアウディのようなマークを書いたりとかするんですけども。

このエンブレムにも意味があります。2つの意味があります。一つは、この五輪の重なっている意味、そして五輪がなぜ5色なのか、この2つがあります。1つ目の五輪が重なっているというのは、五大陸といったところまではお答えできる方が多いと思うんですけども、五大陸の団結、五大陸がつながっているんだよという意味が入っています。そして、色は赤、黄色、緑、黒、青、そしてベースの白色、この6色を合わせたら何かを作ることができます。皆さん、いい顔をしていただいています。

このオリンピックのエンブレムの色、6色を使うと、ほぼ全ての世界の国旗を描くことができる。ということで、世界はつながっているんだよ、世界は平和なんだよという意味が込められるということで、平和の祭典といったところがオリンピックと関わっているというのがエンブレムになっている。そういったものをオリンピック教室を通じて、中学校向け、中学生向けに話をする。オリンピックってこういうもので、こういう思いがあるんだよということを伝えているのが、私のアンバサダー活動になります。

このアンバサダーとして活動する前に、先ほどご紹介いただいたように、2010年にオリンピックに出場させていただきました。橋本大臣に断腸の思いで団長を務めていただいたオリンピックだったんですけども、そのときに私としてすごく感動したことがあります。それは、とてもアスリートファーストだったこと。それまで、2006年までというのは、オリンピックは日本選手団全員で移動をして、実際に開会式から閉会式までいなければならないというようなものでした。2010年からは橋本大臣が団長になられてからは、開会式に出なくてもいい、閉会式に出なくてもいい。ただ、自分の演技、そして自分のパフォーマンスが最高にできるように元気に入ってください、というふうになりました。そういったところで、多分、日本オリンピック委員会内で戦っていただいた、そのアスリートを思う気持ちというのが、すごく強かったというのが、僕の2010年の思い出になっています。

そういった場面、場面といったところで、しっかりと何が最善なのかというのを考えていくというのも、オリンピックで感じさせられたこと。そういったものを今は、何か悪いことが起こって、苦しいことが起こったとしても、自分の最善のものを選んでいく。自分がどういうふうに進んでいけばいいのかを考える、そういったものを子どもたちや、もちろん大人にも考えていただく、そんな機会をつくっているのがオリンピックのイベントなのかなというふうに思っています。

猪飼：ありがとうございました。そして、橋本大臣、大臣は7回ものオリンピックに出場されていますけれども、そのご経験を踏まえてスポーツそのものの魅力、そしてスポーツの持つ力、さらには市民に対して何をスポーツがもたらしてくれるのか、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

橋本：先ほど、小塚選手、小塚君のほうから、バンクーバーのときの話がありましたけれども、私が初めて団長をやって、そのときに最高のパフォーマンスをしてもらうためにどうすべきなのかということ考えたときに、まさにアスリートファーストでいこうということ、そのままやったということだけなんですけれども、でも、なぜ、そういうふうに思ったかというふうにありますと、自分自身がアスリートのために、あまりアスリートファーストじゃなかったんですから、逆に言えば、もっといい成績を上げられたかもしれない。鈴木靖さんの時代とか、私たちの時代というのは、例えば、オリンピック・パラリンピックというのは教育ですから、教育として、人としてどうあるべきかということから学ばせるというのは当然のことなんですけれども、一方で、せつかく4年に1度のことであるので、4年に1度の最高のパフォーマンスをもらう、あるいはするためには焦点をそこに合わせる。そうすると、あらゆるリスクを背負わせることなくして、そして自分自身が目指す最高のものをしていくために、選手というものがファーストであるべきだなと。

例えば、開会式一つにしても出たい選手はもちろんいるので出ます。でも、後半のほうの競技の選手は、出たくても当然後から来なければいけないので、開会式は出られないので開会式だけとなったり、そのときのパターンによるんですけれども、いろいろあるんですね。でも、私が選手の頃というのは、オリンピックの開会式も全て立ったままだったんです。大変な足がばんぱんになって、それでも座ってはいけなとか、規律正しくしなさいというふうなことなんですけれども、あした、あさって試合の選手も同じようなそういうふうな場所になりますと、これは出たくないと思うわけですね。

私自身がそうだったものですから、そういったこと一つ一つを経験していくと、やっぱり、IOC、国際オリンピック委員会も変わっていくべきだ。JOCも変わるべきだというふうに思いまして、そこからいろんな意見を言って、そしてここ数回のオリンピックからは、入場行進をしてきたら選手たちは観客席に座るようにしたんですね。そうすることによって一体感を持って、オリンピック・パラリンピックを楽しめるようにということで、体に負担を掛けず一緒になって楽しむという、私自身が経験してきたことを、そのまま通り過ぎるということではなくて、変えていくべきところはしっかりと変えて、守るべきところは守っていくというふうなことが一番重要ではないかということで、先ほど小塚君がお話したことにつながっていくんですけれども。

もう一方では、やはり、先ほどの話になりますけれども、オリンピック・パラリンピックというのは、すごくお金がかかると言われています。お金がかかるからやらないのか、でも未来への先行投資としてお金をかけるのかというふうに変えれば、全く変わってくる大会になるんですね。無駄だと思うか、未来のためにやるべきことが、しっかりと見えてくるまちづくりをするのかとなったときに、札幌の街が変わったというように、今回の東京も無駄ということではなくて、未来への投資をするんだ、それが持続可能な社会をつくり上げていくんだということの、メッセージ性を持って大会をしなければ大きな間違いをすることになるものなんですから、そのことをしっかりと伝えていけるような大会にしたいなど

いうふうに思います。

猪飼：ありがとうございました。2つ目のパートに参りたいと思いますけれども、東京 2020 の成功に向けてというテーマで進めたいと思います。オリンピック開幕まで、いよいよ半年を切りました。まずは、秋元市長に伺います。札幌市は、去年 11 月にマラソン、競歩の開催が決定したわけですが、札幌開催の意気込みを動画と併せてご紹介いただけますでしょうか。

秋元：それでは、マラソンコースの動画を見ていただきながら、お話をさせていただきたいと思います。

まず、スタート地点ですが、大通公園になります。テレビ塔を背景に、ここを 2 周します。大通公園を 2 周して、まず大通公園から見る札幌の風景を全世界に流す。35 億人の方々が、恐らく、オリンピックを観戦するだろうというふうに言われています。次に、北海道大学に入ります。北大の構内を緑の中を抜けていく形になります。まさに、北海道らしい、札幌らしい風景を、ここは 3 周しますので、恐らく一番多くの方にここを楽しんでいただけるんじゃないかなというふうに思います。そして、北海道庁、赤れんがのところ。ここから赤れんがを後ろにしまして入っていきます。道庁の赤れんがを背景にしながら、大通りに戻ってさらに北へ行って、北大の中を含めて 2 周を走るというコースになります。

そういう意味では、映像的にも北海道、札幌らしいところを発信して、多くの方に楽しんでいただけるんじゃないかなというふうに思います。ただ、スタジアムではないものですから、今ここにありますように、有森裕子さんが優勝されたときに優勝ランといいますか、国旗を背負って走りましたが、こういった場所をどうしようかというのはこれから調整になります。例えば、右側にありますけれども、ファイターズの優勝パレードのように、札幌駅前通、大通などを優勝された方々の勝利ランといいますか、こういったものができるといいかなと、こんなふうに思っています、これから組織委員会などと調整をしていきたいと思っています。

そして、オリンピックが終わった後に、ここを聖地として使っていけるようになればいいなと思っています。日程は、ここにありますように 7 月にサッカーの 1 次リーグが行われまして、8 月の 6 日、7 日が競歩であります。それから、マラソンということです。競歩は、先ほどもオリンピックのトークの中で、メダル獲得のチャンスがかなりあるということでありまして、なかなか競歩を見る機会というのはありませんので、ぜひ競歩という結構特殊な歩き方をします競技を楽しめることができれば良いなというふうに思いますし、まさに去年のラグビーのワールドカップじゃないですけども、本当に時間のない中でこれを成功に結び付けていくという意味では、オール北海道で全ての人たちが、これからボランティアの願いをまたしていくことになろうかと思っておりますけれども、オール北海道で ONE TEAM で、この大会を盛り上げていければなというふうに思っていますし、また、こういう感動を北海道、札幌で味わいたい、体験をしたいという声につなげていきたいなと、こんなふうに思っています。

猪飼：ありがとうございました。続いて、林市長に伺います。林さん、横浜でも東京 2020 大会のさまざまな競技が開催されますけれども、その開催に向けた取り組みについてお伺いしたいと思います。

林：ありがとうございます。今、秋元市長がご説明されましたが、札幌市をはじめ、5つの指定都市で競技が開催されます。そして、16の指定都市がホストタウンとして、懸命に準備をしているところです。

横浜では、サッカー、野球、ソフトボール競技が開催されます。サッカーは、昨年ラグビーワールドカップが開催された日産スタジアムで、決勝、準決勝を含む 1111 試合が行われます。日産スタジアムは、FIFA ワールドカップ、ラグビーワールドカップに続き、今度のオリンピックと、世界三大スポーツイベントが開催される、世界唯一のスタジアムになります。

また、横浜市は、現在、英国をはじめ、アフリカやヨーロッパなど、8か国のホストタウンになっています。これまで、各国のオリンピック選手や関係者の皆さんと、例えば、イギリスの共生社会文化をテーマにした体験プログラムの開催など、スポーツにとどまらず、文化・教育など幅広い分野で交流を深めてきました。こうした取り組みを積み重ね、世界各国との友好を深めていきたいと考えています。

横浜市では、2002年の FIFA ワールドカップを機に、多くの市民ボランティアの輪が広がっています。東京 2020 オリンピック・パラリンピックの大会期間中は、2,700名の都市ボランティアの皆さんとともに誠心誠意のおもてなしをします。横浜市が一体となる、素晴らしい時間だと思います。

それから、本日も北海道オール・オリンピアンズの方たちが、のびやかに話されていて感動しました。1回北海道オール・オリンピアンズのように、オリンピック・パラリンピックに出場した方が集まっている会は横浜にはないと思います。今後研究していきたいと思っています。横浜市でもオリンピアン・パラリンピアンと子どもたちが触れ合う機会を積極的に作っています。東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会開催が決まってから、市内の小中学校 247校にオリンピアン・パラリンピアンの方をお招きして、講演や実技指導などの特別授業を行っています。このように一流の選手と触れ合う経験というのは、素晴らしい経験です。東京 2020 オリンピック・パラリンピックは、人が生きていく上で大事な愛を含んでいる大会だと思いますので、それを心に命じてやってまいります。ありがとうございます。

猪飼：ありがとうございました。本当に皆さまご多忙でいらっしゃいますので、この後のスケジュールもございますので、今、紙が入ってまいりましたが、この後はお1人さま2分以内、ないしは1分半以内でコメントをお願いいたします。続いて、小塚さん、お願いいたします。駆け足でまいりたいと思います。アンバサダーとして、ご自身の東京 2020大会に向けた機運醸成の意気込み、それから札幌秋元市長、それから横浜の林市長に向けたメッセージをお願いしたいと思います。

小塚：私からコメントすることはないんですけれども、でも僕自身も 98 年の長野オリンピックを見てオリンピックに出場したいというふうに思いました。思っただけで帰ってきたら、たまたま父が 68 年のオリンピックに出場していたということもあって、バッジを見せてもらいました。そのときに、このバッジが欲しいといったところからオリンピックを目指し始めたんですね。なので、そういうふうに何かしらオリンピックというものを契機に子どもたちだったりとか、もちろん高校生であろうと、大学生であろうと、スポーツ、オリンピックに挑戦する権利というものはあると思います。なので、ぜひオリンピック・パラリンピックをしっかりと開催していただいて、全ての方に権利があるこのスポーツをやるという権利を示していただけたら、嬉しいなというふうに思っています。

そして、少しだけ告知をさせていただきたいんですけれども、中にパンフレットが入っていたと思います。2 月 24 日にオリンピックという名前は使えないんですけれども、オリンピックアンが感じたものを皆さんに感じていただく、そんなイベントを開催します。こちらは、札幌オリンピック 2030 の機運醸成といったところを、少し考えてやっているものと、あと 2020 のオリンピック、マラソンだったりとか、サッカーだったりとか、マラソンに関していうと有森裕子さんに来ていただいて、北海道マラソンでオリンピックを決められましたよね。なので、北海道について地の利はしっかりと把握されていると思うので、みんなと一緒に歩きながら北海道の札幌で開催される東京オリンピックは、どういったところにポイントがあるのかとか、そういった話を聞けるのかなというふうに思っています。参加は無料になっていますので、ぜひご親族だったりとか、お友達だったりとかをお誘いいただいて、参加していただけたら嬉しいなというふうに思っています。

ちなみに開会式には、オリンピックといえばアーティストの方が来て、歌唱を披露していただくこともあると思うんですけれども、地元の歌手の大黒摩季さんに来ていただいて、歌唱を披露していただきます。何を歌っていただくのかは、まだ秘密ということで、ぜひ会場に足を運んでいただいて、一緒に楽しみたいなというふうに思いますので、よろしくお願ひします。

猪飼：ありがとうございました。来週のイベントの PR もしっかりとコンパクトにまとめていただきました。ありがとうございました。さて、橋本大臣に伺いたいと思います。ここまで秋元市長、林市長、そして小塚さんと、それぞれの 2020 大会の成功に向けた思いというのを語っていただきましたけれども、改めて橋本大臣にオリンピック・パラリンピック担当大臣として、その東京 2020 大会に向けての思いをお聞かせいただきたいと思います。

橋本：ありがとうございました。ちなみに林市長は、右脳はばっちり動いていると思います。そうしないと、これだけの若さと美貌は保てないと思いますので、よろしくお願ひします。そして、2020 年東京大会の私自身としては、やはり感染症が今は一番大きなテーマになってきましたので、初めてのことでなんなんですけれども政府側に私は今回立ちました。やはり、現場を少なくとも知っている者としては、各全ての競技団体、オリンピックの種目でない、パラリンピックの種目でない競技も含めて、全ての開催都市と、そして組織委員会、東京都、

JOC、JPC、全ての競技団体の皆さんに責任者に集まっていただいて、そして感染症対策の窓口をつくるということで、話し合いをさせていただくことを先日やったんですけれども、安心と安全の大会というものが、いかに日本としてやるべきなのかということ、そのことによって、これから東京の大会を通じて、今まさに直面する地球規模の課題の解決に向かって、しっかりとやっていきたい、そのことに尽きるというふうに思っていますので、全力で頑張ります。ありがとうございます。

猪飼：ありがとうございました。さて最後のパートにまいりたいと思いますけれども、東京2020後のその先に向けてというテーマについて伺っていきたくと思います。まず、林市長、東京2020大会のレガシーについて、どのようにお考えかお聞かせいただけますでしょうか。

林：私は、新千歳空港からこの会場に向かう途中、トワ・エ・モアさんの「虹と雪のバラード」という歌を思い出しました。1972年、私はそのとき26歳で結婚して3年目でした。真っ青な札幌の空、輝くような白銀の世界、そこに跳躍するアスリートも、流れていたあの歌も生涯忘れられません。1972年の札幌オリンピック想い、そして今回、2020年のマラソンのコースを拝見し、とても素敵で感動しました。生で見ることが一番大事なことです。生のアスリート、オリンピック・パラリンピアンを見ることはなかなかありません。ぜひ、皆様にお願ひしたいと思ひます。ここにいらっしやる方は全員賛成だと思ひます。私が26歳の頃、感じた北海道への憧れと夢、あの思いをもう一度味わわせていただきたい。もし招致されたら私は84歳ですが頑張ります。大会運営や選手観客へのおもてなし、文化プログラムやインフラ整備、ソフト、ハード、文化的にも札幌は素晴らしい街街です。札幌文化芸術劇場「hitaru」を造り、右脳と左脳のバランスが取れた札幌です。世界中の人にこの札幌を見せてあげてほしい。皆さん、よろしくお願ひします。指定都市全体で応援しますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。今日は、ありがとうございます。

猪飼：ありがとうございます。指定都市市長会の会長、林市長から力強いお言葉をいただきました。続いて小塚さんに伺いたくと思ひます。小塚さんには、スポーツイベントの開催を通じて地域活性化という大きな夢があると伺っていますけれども、その夢についてお聞かせいただけますでしょうか。

小塚：今、林市長がおっしゃられた指定都市、全部の指定都市で応援して下さるということなので、冬季のウインタースポーツ出身の者としては、すごく心強い言葉をいただいたなというふうに思っています。ぜひ、ウインタースポーツフェスティバルも横浜で開催させていただければなというふうに思ひますし、本当にオリンピックが育む愛というものを全国で感じて。残念ながら2020について言うと、まだまだ僕の出身の名古屋では盛り上がっている気がしないなというふうに感じているところで、実際に多分、開催されればどんどん、どんどん盛り上がっていくと思うんですけれども、2030に向けては、これは2020のレガシーとして2030札幌大会が開催される前から、少しずつオリンピック・パラリンピックを盛り上げていけたらいいなというふうに思ひますので、ぜひ今後も引き続きよろしくお願ひします。

猪飼：ありがとうございます。では、橋本大臣に伺います。ご来場の皆さまに大臣がお考えになる、東京 2020 以降の夢、そして 2030 年冬季オリンピック・パラリンピック招致へ向けたメッセージをいただけますでしょうか。

橋本：ありがとうございます。やはり、非常に科学技術が進歩していく中で、もちろん便利な社会をつくっていくということは、少子化、あるいは人手不足ということを考えていくと、AI とか、IoT、ビッグデータとよく言われますけれども、大変便利な社会になっていくと思うんですね。でも、それを動かすのも人だと思うんです。この人が動かしていく中で、やはり、困難なことにチャレンジをするということは人の成長だと思うんです。

今の若い世代の子どもたちは、そういった科学技術、あるいは便利な社会の中で生きていくことによって、なかなか苦勞するといいますか、困難なことに直面するということを、周りは避けようとするものですから、安心・安全が保てなければそれはいけないと思うんですけども、でも自らの成長を遂げていく過程においては、努力をするということ、我慢するということが、諦めないということというのは、成長の過程で非常に大切なんですけども、それを今、社会が実現することができるかという、昔に比べて非常に少なくなっているんだと思うんですね。なので、今こそスポーツを通じて自らを鍛え上げる、自らを切り拓いていこう、そして困難なことに直面することがいかに自分自身の将来のためにつながっていくんだということを教えるためには、やっぱりスポーツというのは最大の教育の場でもあると思いますので、そのことを一つの大きなテーマとして、2020 年の大会から人づくりというものに、もう一度しっかりとこの国が向き合っていけるような、レガシーをつくっていきたいというふうに思います。

猪飼：ありがとうございます。秋元市長、林市長、小塚さん、そして橋本大臣から未来に向かってのメッセージをいただきました。秋元市長にも最後の締めくくりとしまして、2020 大会のその先についてお話ししたいと思っています。

秋元：先ほど大臣のお話の中にもありましたように、1964 年の東京大会とか 72 年の札幌大会というのは、高度成長期で街が発展をしていく途中の本当にそのきっかけとなる大会だったと思うんですね。よく言われるのは、じゃあこの成熟した都市の中で、今このタイミングでやるオリンピック・パラリンピックはどういう意味があるんだろうかというふうな質問があります。まさに先ほど大臣がお話しされたように、今、直面しているいろいろな課題を解決していくきっかけというふうに、この大会をしていく必要がある。2020 年のレガシーを生かしていく、それを 30 年に向けていくということだろうと思うんですね。

具体的には、例えば、超高齢化が進んでいます。健康寿命を延伸させるために、先ほど大臣のお話の中で予防医学とかスポーツ医学という素晴らしい研究がされていて、それを日常の市民生活の中に取り入れていくことは、まさに予防医学であったりするわけですね。その健康寿命を長くしていくということにつながっていくというふうに思います。

もう一つ、この冬、今年は札幌も雪が少ないというふうに言われました。ヨーロッパでは、ほとんど雪がありません。だんだん、この冬の大会をやる場所がなくなっている。気候

変動ですね。気候が大きく変わってきている。地球の温暖化ということです。まさに、この地球温暖化に対応していく方策を、今、やっていかなければいけない。ちょうど2030年に札幌が目指している冬季オリンピックの大会は、SDGsの持続可能な開発目標の目標年次です。つまり、今後の持続可能な社会をつくっていくためのステップ、プロセスにしていく。先ほど大臣がお話になったように、子どもの将来の教育ということもありますし、先ほどの健康の問題、そして環境の問題。パラリンピックが今度は札幌で初めて行われるということになりますので、共生社会、まさに共生。健康、環境、共生、それが経済とか観光のさらなる発展につながっていけばいいなというふうに思っています、次の時代につながっていくものを、この2020年から30年にかけて、さらにはその30年に向けて進めていく、さまざまな課題を解決していくものとして、スポーツを通じて実現していけばいいなと、このように思っています。

猪飼：ありがとうございました。本当は皆さまのお話を、もうちょっとじっくりと聞きたかったという方も多いと思いますが、お時間の都合もありまして、これをもちましてクロストークは終了とさせていただきます。ご登壇いただいた皆さま、誠にありがとうございました。どうぞ拍手でお送りください。